

## 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因

“REPRINTS” 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から

フジワラ 藤原 佳典*	ヨシノリ ヨシダ 大場 宏美*	ワタナベ ヨシダ 吉田 裕人*	ナオキ ヒロト 佐久間尚子 <sup>2*</sup>	ニシ サクマ 天野 秀紀*	マリヨ マナオ ヒデノリ 内田 勇人 <sup>3*</sup>	イ フカヤ ウチダ ハヤト	サン タロウ ハヤト	ユン 太郎 ハヤト
カクノ 角野 文彦 <sup>4*</sup>	フミヒコ 新開 省二*	シンカイ ショウジ						

**目的** 2004年6月より高齢者による学校ボランティア活動（絵本の読み聞かせ）を通じた児童との世代間交流型介入研究“REPRINTS”（Research of Productivity by Intergenerational Sympathy）を開始した。対象児童の高齢者イメージの関連要因，および“REPRINTS”ボランティア（以下，ボランティアとよぶ）の1年間の活動により，対象児童の高齢者イメージがどのように変化したかを検証する。

**方法** 川崎市立A小学校（住宅地，児童数470人）を対象にボランティア4～6人が週2日訪問し，絵本の読み聞かせを継続した。ボランティア試験導入開始1か月後に初回調査，その後，6か月ごとに第二回，第三回調査（集合・自記式アンケート）を行った。調査項目は，基本属性，SD（Semantic Differential）法による高齢者の情緒的イメージ尺度10項目短縮版（「評価性」因子6項目と「活動性・力量性」因子4項目），祖父母との同居経験，祖父母等の高齢者との交流経験（以降，高齢者との交流経験総得点とよぶ），ボランティアから読み聞かせをしてもらった経験（以降，読み聞かせ経験とよぶ），社会的望ましき尺度短縮版。

**結果** 多重ロジスティック回帰モデルにより初回調査で「評価性」因子得点が高い（高齢者に対し肯定的なイメージをもつ）ことに関連要因は低学年，高齢者との交流経験総得点高値が，「活動性・力量性」因子得点が高いことに関連要因は低学年，男子，社会的望ましき尺度短縮版高値が抽出された。

次に，初回，第二回（6か月後），第三回調査（12か月後）のうち，二回以上の調査で，「読み聞かせ，あり」と回答した児童を読み聞かせ経験の高頻度群（170人），一回以下の児童を低頻度群（175人）とし，これら二群の「評価性」因子と「活動性・力量性」因子の得点変化を一般化線形モデル（学年，性，高齢者との交流経験総得点，社会的望ましき尺度短縮版を調整）により評価したところ，「評価性」因子の群間と調査回数に交互作用がみられた（ $P=0.012$ ）。

**結論** 高齢者イメージは児童の成長とともに低下する可能性あるが，“REPRINTS”ボランティアとの交流頻度が高い児童では，1年後も肯定的なイメージを維持しうることが示唆された。

**Key words**：シニアボランティア，世代間交流，児童，高齢者イメージ

\* 東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム

<sup>2\*</sup> 東京都老人総合研究所自立促進と介護予防研究チーム

<sup>3\*</sup> 兵庫県立大学環境人間学部

<sup>4\*</sup> 滋賀県東近江地域振興局地域健康福祉部  
連絡先：〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2  
東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム 藤原佳典